

表紙について ▶ 豊岡のイチゴ

但馬の冬は、低温、低日照という不利な条件ですが、ハウスで生産されるイチゴの旬は、12月下旬から、翌年の2月中旬頃とされています。

開花後、低温ということで着色まで日数を要します。この間に味がのって甘いイチゴへと仕上がります。

ハウス内という密閉された空間で栽培されているため、受粉はミツバチの力を借り、味・大きさの決め手は、灌水・追肥の頻度と摘果による着果数の制限が重要なカギを握ります。以前は宝交早生という品種でしたが、時代とともに、とよのか・章姫・紅ほっぺ・かおり野と変遷していき、大粒で甘酸のバランスのとれた品種が好まれています。

(農業委員 宮岡 正則)



全国農業新聞を購読してみませんか!

農業の最新情報を提供

週刊(毎週金曜日発行) 月 700円
(送料、消費税込)

*お申し込みは

農業委員会事務局または、
地元の農業委員・推進委員
まで

編集後記

新元号『令和』には、穏やかで平和な時代になってほしいという思いが込められているそうです。令和二年はまさに、とても穏やかで暖かい年明けとなりました。

一月のある日、冬期湛水の田んぼの傍らで見かけた二羽のコウノトリも、平穏な日々を願っているかのようでした。



近頃足腰の衰えを感じ、ウォーキングを始めました。近所を歩きながら眺める田園風景には心癒されます。しかしその一方で、親から子へと当たり前のように受け継がれてきた農地が、今、存続の危機にあります。

このかけがえのない農地を守り、次代へ繋ぐことは私達の責務です。そのために何をすべきか、一人一人が今一度考え、知恵を出し合って、行動を起こすことが大切だと思います。

(編集委員長 齋藤善久)



農業委員会だより第45号は私たちが担当しました。
後列左から 加悦富美恵、齋藤善久、村田憲夫
前列左から 宮口豊隆、田中直喜、宮岡正則